

さがみの古代に生きた人びと

縄文時代の貝塚と食べ物

貝塚には、人々が食べた貝がらや魚や獣^{けもの}の骨、土器の破片などを捨てたものが地層^{ちそう}のように積み重なって残っています。この時代、海に出て漁^{りょう}をすることが始まりました。魚や貝などをとるために、モリ、ヤスや釣り^{つり}ばり^{あみ}、網の垂りなどを動物の骨や角、貝、木、石などを使って工夫して作りました。



縄文土器と弥生土器

縄文土器の中には、私たちから見ると使いづらそうに見えるほど、立体的で複雑な飾り^{かざ}を持ったものがたくさんあります。おまじないや願い事がこめられていたのかもしれませんが。

弥生土器は、コメを中心とした生活に合わせて、つぼ^{つぼ}やかめ^{かめ}などの形が多くなります。ただ、土器づくりの技術は縄文時代にすでにハイレベルであり、弥生土器も縄文土器づくりの技術が引き継がれたようです。

金属の使用

弥生時代になると金属器が使われるようになりました。青銅器は銅剣^{せいとうき}、銅矛^{どうけん}、銅鐸^{どうぼく}など、主に祭りの道具として使われました。ほぼ同じころ、鉄器も使われ始めました。



弥生時代の道具



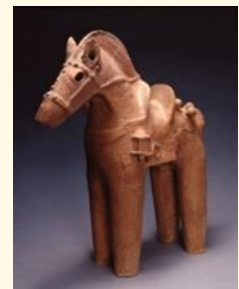
弥生時代になり稲作が行われるようになると、すきやくわなどの木製農具が使われるようになりました。

たとえば逗子市の池子遺跡群からは、大量の農具とともに機織具なども発見されています。

縄文時代に引き続いて石器、骨角器が多く使用されていますが、稲作のための道具作りの技術は大陸からセットで持ち込まれたようです。

埴輪と古墳

埴輪は古墳の上や周囲に並べられた土製品です。円筒形をした円筒埴輪と人物、動物、家などをかたどった形象埴輪があります。写真の埴輪は三浦市の向ヶ崎古墳出土の馬をかたどった埴輪です。



相模国分寺



相模国分寺は、741(天平 13)年の聖武天皇による国分寺建立の詔によって、8世紀半ばごろ、今の海老名に建てられました。ジオラマは創建時の建物群を復元したものです。右に金堂、左に七重塔が並び、正面後方に講堂が配置される伽藍配置は「法隆寺式」と呼ばれます。

高座郡衙※で使われた灯明皿

奈良時代から平安時代にかけて、相模国には国府のもとに8つの郡が置かれました。2002(平成 14)年、茅ヶ崎北稜高校のグラウンドの調査で官衙(昔の役所)の遺跡が発見されました。現在の茅ヶ崎市は高座郡にあったことから、発見された遺跡は相模国高座郡の郡衙(郡役所)の跡であることが明らかになりました。

写真は、そこから発見された灯明皿です。なたね油などを入れ、灯心に火をつけて明かりをともしました。



※国府・郡衙

古代律令制度のもとで置かれた地方の役所